

田中政権出現と創価学会・公明党の動き (3)

平野 貞夫
元参議院議員

安倍自公政権は「フォーラム21」7月号が発刊される頃、最大の危機となり安倍政権総辞職となる可能性がある。その場合、創価学会と公明党がどんな政局選択をするか。その結果によつては創価学会解体という流れになるかもしれない。そんな思いを持ちながら、田中角栄政権下で前尾繁三郎衆議院議長長の指導で、公明党がどんな政治姿勢だったかの話に戻そう。

国会対策費の乱れに驚く

1973 (昭和48) 年5月29日に衆議院議長に就任した前尾議長に、国民も野党も信頼と期待を持つてくれた。自民党の党籍を離れたことによる。ところが自民党側は、これまでの自民党籍の議長と違つて自民党の言い分を聞いてくれない前尾議長に不満を抱いてい

た。

そんな時期、自民党内に「青嵐会」という右翼グループが結成された。中川一郎を代表に、石原慎太郎・浜幸こと浜田幸一らで、中国との国交回復などで反田中政権と反創価学会・公明党が特徴であった。

その上に自民党の長老である橋本登美三郎幹事長がいたが、まったく調整能力がなく与野党対立法案を衆議院の関係委員会で強行採決したため、すべて前尾議長の下で与野党妥協の話し合いをする事になった。その結果、6月と7月の2カ月間で「防衛二法案・国鉄運賃値上げ法案・筑波大学法案」等を前尾議長長の調整で衆院を通過させるということになる。これでは政党政治ではない。国会機能の低下に驚きを隠せなかった。

そんな最中の7月のお盆時期のある日、二階堂進官房長官から、前尾議長と私邸で会いたいとの連絡が入り、週末の金曜日の午後、来訪を受けた。大きな紙袋をさげて玄関を入り、10分ぐらい二階堂官房長官は前尾議長と懇談し退出した。前尾議長に呼ばれて応接室に入ると、「こんなことだから日本に民主政治が育たないのだ」と怒つて、大きな紙袋を廊下に放り出した。その袋からは封印紙で束ねた一万円札がこぼれていた。私が拾つて紙袋に入れると500万円あった。

「どういうことですか」と私が問うと、前尾議長は「盆と暮に議運(議員運営委員会)理事用に、議長から配るよう慣例になっているらしい」としか言わない。私も驚いた。6年ぐらい前の副議長秘書時代、議長や副議長からこういう形での現金配布はなかった。自民党国対や官邸から野党側に裏金が渡されていたことは承知していた。6年の間に国会がからむ裏金が慣例とは、政治の劣化に憤りを感じた。

ほおつておくわけにもいかず、「どうなっているか事務総長に聞いて対応します」と私が言うと、前尾議長は「これを持ち帰りそうしてくれ」とのこと。院内に帰り、知野虎雄事務総長に相談すると、「官邸から議長に盆暮にまとまったカネが届いている話は聴いて

いた。これまで議長が自民党籍だったので、自民党籍の議運委員長が処理していたんだろう。事務局の仕事ではないが、前尾議長への考えも活かすべきだが、慣例になっている現実を止めるわけにもいかん」となった。

そこで当時の海部俊樹議運委員長とも相談し、新しい配分を決めて前尾議長から季節の挨拶ということ、議長秘書の私が配ることになった。前例を参考とし、共産党理事には配布しないことにしたが、問題は公明党理事をどうするかである。私が率直に大久保直彦理事に相談すると、「現金は絶対だめだ。適当な品物なら返却しない」とのこと。そこで配分表を作るのと、100万円不足となった。

翌週月曜日の朝、議長私邸に行き「これまでの慣例は悪いが、前尾議長で止めると角が立つ」と、知野事務総長と相談した結果を説明した。「ついでには100万円不足なので」と言うと、前尾議長は「わかった。まかせるので不足分は私が出す」と問題は解決した。

その日の夕方、前尾議長夫人の実弟である塩崎某氏が私に100万円を届けに来た。「株を売つてつくつたものですよ」と耳打ちをしてくれた。

議長秘書の首を繋げた宮本顕治と公明党

官邸からの「益暮用機密費問題」が、一段落してホットしたのも束の間、就任して2カ月もたない前尾議長が首が飛ぶような大事件が発生する。田中首相の滅茶苦茶な国会対策である。田中政権は前年の総選挙で、共産党が40名と野党第二党に躍進したことから、院内会派として強く迫ってくることに恐怖した。そのため衆院に小選挙区制を導入しようと、強硬な国会対策をとってきた。

そのため国会審議が著しく遅れ、内閣提出法案の成立がほとんど望めなくなった。会期延長を7月24日までの65日間とすることを、自民党単独で強行採決した。これが原因で中村梅吉議長が辞任し、前尾議長が誕生したいきさつがあった。前尾議長は就任にあたって野党との国対委員長会談で、「今後、単独採決の国会運営は行わない」と約束していた。

それが7月中頃になって、衆院から送付した生活関連法案を中心に、重要法案のほとんどが参議院で賛詰まりとなった。そのため田中政権は、12月まで通年国会となる長期国会延長の強行採決をやるうとした。前尾議長と与野党が協議を続けたが合意できず、国民生

田中首相が帰国する前日、議長室で社公民3党の国対委員長と前尾議長が偶然会ったという運びになった。共産党は参加しなかった。その時の前尾議長の見識が見事だった。3野党の抗議に対し、「約束を破ったことで君たちに謝るつもりはない。国会空白の事態をつくったことで国民には謝る」と。それが報道され、3野党は「国会正常化収拾の前尾議長の見解」を聞くことの流れになる。

8月9日、前尾議長は与野党の国対委員長と個別に会談する。前尾議長は「事態収拾のための議長見解」を与野党が一緒に国対委員長会談に提示することになった。ところが、共産党の松本善明国対委員長が応じる条件を出した。「平野議長秘書の処分が、正常化への国対委員長会談に応じる前提だ」となった。

その理由は、「24日深夜、会期延長強行の直前に共産党国対委員長として、前尾議長に会談を申し入れた。平野秘書は議運委員長らと用談中、終わり次第連絡すること待っていた。ところが何の連絡もなかった。不誠実な対応は意図的で、議長秘書として不公正な行為」とのこと。

翌10日、前尾議長要請の与野党国対委員長会談が開かれる午前10時直前まで、共産党の松本国対委員長が

活に直結する重要法案で成立が急がれる法案が多数あった。前尾議長は「議長職より国民生活が大事だ」と、辞める腹を固め、9月27日まで65日間の会期延長を決意。7月24日に自民党単独議決を行った。

野党側は怒りが心頭にきて、「前尾議長は約束を破った。責任を明らかにするまで審議を拒否する」方針を決めた。前尾議長は「国民生活のことを野党はなんと考えているのか」と野党を批判し、「国民の反応をみて、辞める時期を決めよう」との姿勢であった。

一方、田中首相は7月29日から6日間、日米首脳会談のため訪米の予定があった。世の中は夏休みに入る。そこで様子を見る事になったのだ。

8月に入ると、世論は「参議院の河野謙三議長は野党を選んだ関係で、参院での審議を野党寄りに気をつかう。問題は参議院の国会運営にある。なんで衆議院の前尾議長が辞めるのか」となった。公明党の大久保議運理事から電話で「議長と話を始める切っ掛けがないか」とのこと。「野党の国対副委員長クラスが、前尾議長の様子を知りたいと、気軽に議長室を訪問してくれないか」と提案したところ、「前尾議長が登院する日を教えてくれ」と、大久保理事が動いてくれることとなった。

出席するかどうか不明であったが、ギリギリになって議長公邸に到着。全党による国会正常化が実現した。「平野秘書の処分」についてどうなったのか、気にしていたところ翌11日の「赤旗」（日本共産党機関紙）に小さく宮本顕治共産党委員長のコメントが載っていた。

「政治家は政治家と対峙すべきだ。国会職員を政治に巻き込むべきではない」と、松本国対委員長を叱責する意味のことが記されていた。私の首が繋がった。このことを後日、大久保理事に話したところ、「詳しくは言えない」と逃げられた。何か背景を知っている様子だったが、それ以上聞くつもりもなかった。

松本国対委員長は、次の第72回臨時国会から国対委員長を降ろされ、共産党は村上弘国対委員長に代わった。前尾議長に挨拶に来た村上国対委員長は私に「僕は議長に会いたい時、君の言うことを聞かないからな」と呟いた。党内で問題となっていたようだった。

この田中政権の時期、「創共協定」の非公式協議が始まっていたようだ。公明党の大久保理事が、私のことと動いてくれた気がしてならない。